

翻訳について

下 村 誠 二

一

幸福な家庭はみな一様に似通っているが、不幸な家庭はいづれもとどりに不幸である。トルストイはアンナ・カレーニナの巻頭にこう書いている。せっかちな現代の読者は、この格言めいたことばの意味をよく考えて見ようともしないで、一刻も早く不幸な家庭のとりどりなる不幸を知ろうと先を読み急ぐことであらう。しかし、こゝにせっかちでない読者でも通常見落してしまう一つの事実がある。それは他でもない、「幸福なる家庭云々」というこの文章を書いたのは実はトルストイではなかったということである。彼がペンをインク壺にひたしてすでに書始められていたアシナ・カレーニナの原稿の冒頭にさらさらと書き加えた文章は *Все счастливые семьи похожи друг на друга, каждая несчастливая семья несчастлива по-своему.* といふのであった。これが、あの耳の下からあごにかけて濃いひげに縁どられた角ばった顔に狐のような眼をひかせている四十代のロシア人トルストイの頭にうかんだ文章であり、彼が大作アンナ・カレーニナ全巻に冠するにふさわしいと考えた真理なのであった。とすると、「幸福な家庭云

云」という文章は一体どこから出て来たのであろうか？ 誰が書いたのであろうか？

後の問に対する答はこの場合ロシア文学者原久一郎氏である。こう言うと、なんだ馬鹿々々しい、と一笑に附する人もあるだろう。又、いや、それは違う、書いたのはトルストイで原氏は訳しただけだ、訳者は著者ではない、と抗議する人もあるかも知れない。なるほどたしかに原氏がアンナ・カレーニナを書いたとも、中村白葉氏が書いたのだとも言う人はいない。しかし依然として、トルストイが「幸福な家庭は……」と書き始めたのでない事は動かせない事実である。その証拠には、もし私がこの小文の書き出しを次のようにしていたらどうであらうか？

All happy families are alike but an unhappy family is unhappy after its own fashion.

トルストイはアンナ・カレーニナの冒頭でこう書いている。……（英訳は R. Edmonds）

「幸福な家庭……」を何の気なしに読み過した人も、*All happy families……*には抗議を申し立てるか少くとも奇異の感に打たれるにちがいない。引用が外国語である事が我々に言語を意識させ、その意識が我々にトルストイの母国語を思い出させるのである。彼が *All happy families……* と書いたという文章はたしかに抵抗なしに読むことはできない。そして、もしこの文章がおかしいとすれば、彼が「幸福な家庭は……」と書いた、という文章はなおさら奇妙だと言わなければならない。何となれば、トルストイが英語の文章を書くことは全然考えられないことではないのに反して、日本語を書くことはまずありえないからである。

そこで問題は前に戻る。もしトルストイが書いたと言っても言いえないならば、この文章は一体全体どこから出て来たのであろうか？

こゝでも再び常識家はただちに答えるであろう。原氏はトルストイのロシア語を読んで、それを日本語に翻訳したのだと。たしかに原氏の行為を「翻譯」ということばで呼ぶのは日本語の正しい用法ではあるが、それが我々の問に対する答となるためには、このことばで表わされる行為が如何なるものであるか、そしてそれが如何にして可能であるのかを知らなければならぬ。翻譯という行為は、あまりにもありふれた事柄であるために、我々はついその意味を深く考えない習慣になっているが、今改めて、例えばこゝにあげた、*Всё счастливое земн……*という文章と「幸福な家庭……」という文章を並べて見る時、又ペンを手にこの文章を書いているトルストイの姿と、通学の電車の中で、文庫本のアンナ・カレーニナをひろげている高校生の姿を思いうかべて見る時、我々は事柄の重大さと思議さに驚嘆せざるを得ない。英語を知らない人がシェイクスピアを読み、ドイツ語を見た事もない人がゲーテに親しみ、ギリシア文字も学んでいない人がパウロの書簡を暗誦するということは、まさに驚くべき現象である。しかし、又、彼らに与えられているものが本とうにハムレットであり、ファウストであるということは、どのようにして保証されるのであるかという点に疑いをさしはさむならば、我々は翻譯という魔術の秘密を説明するという途方もない困難な仕事に直面していることに気づくであろう。

二

さて、翻譯の問題を取扱うための最適任者は常識的に考えて言語学者であるように思われる。たゞ単に事柄が二つの言語に関するというのみでなく、翻譯という行為そのものが特殊な形の言語活動であると考えられるからである。

それにも拘わらず、現在のところ言語学者の多くはこの問題にさして熱心でないように思われる。新聞や雑誌に時々翻訳のことについて書くのはいがいが翻訳の実際家や批評家といった人々であり、たまに外国語を専攻する人が口を出せば他人の誤訳の指摘ぐらいが関の山である。しかしこの事実をたゞちに言語学者の怠慢に帰するのは必ずしもあたらない。彼らの沈黙は事情を知る者の賢い沈黙なのかも知れない。そのことについて考えて見よう。

現在の言語学の中心的な課題は、言語を一つの記号体系と考え、その内部構造を解明してこれを過不足なく記述するにある、という考え方がかなり一般的である。これはソシュールという天才がジュネーヴで弟子達に、言語学の対象は言語 (langue) たるべしと教えて以来、あらゆる言語研究の分野に重大な影響を及ぼしている考え方であり、かつそれにそった研究が興味のある成果をあげている事も事実であるように思われる。しかしこゝに注意しなければならぬことは、そのような体系ないし構造としての「言語」なるものは全くの抽象物であって天地間のどこにも実在しないということである。実在するのはソシュールの用語に従えば言語活動 (langage) とその結果である言 (parole) だけである。さてそこで言語活動からそのような抽象的実体としての言語体系をひき出そうとする努力の当否は今しばらく問わないことにしても、そのみを言語学の対象と考えることには重大な疑問をさしはさまないわけにはいかない。そのような抽象によって我々が言語として漠然と理解しているものから失われてしまう部分があまりにも大きいからである。それは血も肉も捨て去って残された骨格のみをもって人間と称するのに似ている。この考えを極端に押し進めていく時、最後に残るものは体系中の位置のみを有して意味も音価も持たない各要素とその間の相互関係のみになってしまうであろう。そしてこの体系はそれ自体の内部法則によって自立する閉ざされた小宇宙を形成す

るが故に、外部からの規準をもつては如何なる批判も評価もなしえないことになる。さらに又、我々にとって重要な帰結は、このように体系として把握された二つの言語は相互に無縁であり、体系としての全体の構造を比較する以外にはそれらを同列に置いて論じたり比較したりすることは原理的に不可能となるということである。

さて、右のような言語觀をふまえて我々の主題である翻訳に眼を転ずるとそこには奇妙な光景がくりひろげられている。こゝでは、二つの言語が翻訳を契機として何らかの意味で結びついているのである。この結びつきが全く恣意的なものとなれない限り、我々は結合を可能にする何か共通の要素が言語に存在すると考えなければならぬ事となる。そして、閉ざされた体系としての言語を如何程細かく分析してもそのような要素は見出され得ないことはア・プリオリに決っている以上、その共通の要素は右のような言語觀によって捨象されてしまった部分に含まれている、従つてその意味での言語学的方法を以てしては翻訳の問題を扱うことは不可能であるという結論に達せざるを得ない。

このことは又別の角度から見ることにも出来る。翻訳は前述のように一種の言語活動と考えられる。しかるにこの言語活動はいかほど集積し分析し帰納しても「翻訳」なる抽象的实体に到達することは不可能であるように思われる。即ち翻訳は最後まで働きであり作用であつて遂に状態であり体系であることは出来ない。それはあくまでも個別的であり一回的であつて、ソシュールの言う「言」(parole)の段階を出でない。言いかえれば翻訳は常に何かから何かへの誰かによる翻訳であつて、翻訳それ自体なる实体は見出され得ないばかりでなく考えられ得ないのである。勿論我々は翻訳の結果である訳文を眼に見、耳に聞くことは出来る。しかし訳文はもしそれが正しい翻訳の産物であるならば同一言語による他の通常の言語断片といかなる点においても全く異なる所がないはずである。即ち訳文をいかほど分

析しても我々はその中から翻訳なるエッセンスを抽出することは出来ないのである。

そこで我々に残されている途はたゞ一つしかないように思われる。即ち翻訳の出発点と帰着点である原文と訳文を比較し、これに翻訳者自身の内省を加えて、その間に行われた過程をとらえて見ることである。しかしこゝに我々は翻訳についての根本的な懷疑が再び提出されることを覚悟しなければならぬ。即ち、原文と訳文とは二つの別個の言語に属する以上、我々はいかにしてその二つを比較することが出来るのであるかと。この問に対して我々はどのような準備された回答も持ち合わせていない。我々是我々の方法が理論的に可能であるという予めの保証なしに、仕事にとりかゝらなければならない。そしてその成果そのものが方法を正当化することを期待しうるのみである。

三

我々自身の出発点に戻ろう。トルストイの書いた *Бог чуждливое чувство*……という文章が「幸福な家庭……」という文章に正しく翻訳されたとすれば、我々は当然この二つの文章が同じことを意味すると考える。即ちトルストイが「幸福な家庭……」と書いた、という最初の文章は彼がそういう意味のことばを書いたという意味に解釈されるわけである。(こゝで我々が意味ということばを内容とも思想とも言い、かえて差支えないような極めて漠然とした意味に使用していることに注意しておきさえすれば、差当ってこの便利なことばを用いることに異論はないであらう。)このことから翻訳の過程を次のように説明することが出来るように思われる。即ち訳者はまず原文を読んでその意味を理解し、次にその意味を原文から切離してそれと同じ意味をもつ訳文を考えるのである。これは我々自身が翻訳を

行ふ場合の経験と合致するように思われる。

しかしこのような漠然とした仮定に対しても二つの根本的な疑問が提出されうる。その一つは、果して意味は言語から切り離しうるかという疑問である。そしてこの疑問はさらに二様の意味に解釈されうる。その(a)は純粹に言語学的なものである。即ちある言語形式に対応する意味は個々の言語によって定まっている。それは各言語がそれ／＼独自の意味体系をもっているからである。従つて甲言語のある言語形式のもつ意味をそのまゝ有しているような言語形式を乙言語に於て見出すことは出来ない。この意味で意味を言語形式から切り離すことは不可能であると。これに對して我々は比較的簡単に答えることが出来る。こゝで我々が問題にしているのは体系としての二つの言語ではなくして二つの個別的な言(parole)であり、問題としている意味とはそれ／＼の言語形式に対応する意味の總体ではなくしてこの場合に實現されている特定の意味であると。即ち我々はこゝに用いた意味ということばに適當な注釈を加えることによってこの種の疑問を解決することが出来るはずである。これに反して(b)の解釈によるならばこの疑問はやや哲學的な色彩を帯びてくる。即ち人間の思考が言語と密接に結びついているという事実から言語を伴わない思考は不可能である、従つて言語と切離された思想は存在しないという主張がなされうる。この主張を文字通りにとるならば、トルストイの不幸な家庭に関する洞察もロシア語を離れて日本語に乗り移らんとするその瞬間に消滅してしまう事になる。即ち我々が言語と言語を結ぶ絆として採用した意味すなわち思想が、それ自体何らかの言語によらなければ存在しえないことになれば二つの言語は遂に結びつけられえないことになる。この結論は思考が言語なしに行われえないという前提を承認する限り不可避であるように思われる。二つの言語の間に第三の言語を設定することは、たとえ

それが日常言語の欠陥をすべて除去した理想言語であるとしても、たゞ越えられぬ溝を一つふやすだけの結果にしかならないであろう。しかもこの前提を原理的に論破することは差当って不可能であるように思われるから、我々はたゞそれを我々の経験に反するものとして拒否してしまふことが出来るのみである。我々はすでに翻訳が可能であることを事実として受入れているのであるから、これを拒否することは新たな仮説を立てることにはならない。

そこで我々の仮定に対する第二の、より事実的な根拠をもつ疑問に移ろう。それは次のように言い表わすことが出来る。甲言語の原文を乙言語の訳文にうつす際に翻訳者は意味を通過する必要はない、何となれば彼は原文を見ることによって直接的に訳文を喚起することが出来るからである。換言すれば彼にとって原文の意味はとりも直さずその訳に他ならないのである。例えば英語の dog フランスの chien ドイツ語の Hund ロシア語の собака スペイン語の perro などのことばを見れば、それぞれの言語に習熟している日本人は反射的に「イヌ」という日本語を思いだすであろう。彼が門のわきに寝ている首輪をつけた四本足の動物を連想するのはこの日本語を通じてであるのだ。しかも「イヌ」という記号とこの動物の概念とは極めて密接に結びついているから特別の反省を加えない限りこの二つは同一視されている。従って我々は dog, chien, etc. の意味は「イヌ」であるという言い方に少しも矛盾を感じないのである。このような場合に訳者が dog という語を見てまずあの動物を思い出し、次にそれを表現する日本語である「イヌ」に達するという説明は事実在即していない。

さてこの批判はたしかに我々の仮定においては考慮されていなかった一つの心理的事実を指摘している。我々は現実の翻訳の過程に於てこのような事態が起りうることを否定することは出来ない。しかしこの批判が我々の仮定にと

って致命的であるためには、批判者は彼の説く翻訳の過程が可能なる唯一のものであるか、あるいは少くとも最良のものであることを主張しなければならない。

所でこれが唯一のものであることを主張することは事実上次のような一般的な命題を主張することに等しい。即ち一人の人間は意味に直接対応する記号体系を一組しかもつことが出来ない。第二第三の記号体系はたゞこの第一のものに重ねられたもので、それとの対応によってのみ意味と結びつくことが出来るのである。より身近な言葉を用いて言うならば人間にとって真の意味での言語は母国語しかありえない、外国語はたゞこの母国語を通して把握され記憶されるのである。このことは外国語を学習する過程を観察すれば容易に認められる。分らない英語の単語の意味を知るのに英和辞典をひくのはこれに対応する日本語を得るためである。英文の訳はこのようにして得られた日本語の単語を適当に組合わせて作る。いわゆるディレクト・メソッドでも同じことである。教師が一つの果物を指さして *apple* と言う、生徒はそれを見て、なんだリンゴか、と思う。少くとも彼がこの果物をそれと認めることができたのは母国語のおかげである。そして単語帳にリンゴやバナナをはさんでおくわけにいかないからリンゴ、バナナと書き入れる。あるいは声に出してアップル——リンゴ、アップル——リンゴと唱える。要するにどのみち母国語から逃れることは出来ないのである。外国語から母国語に訳すのは比較的やさしいのに反して母国語から外国語に訳すのがむずかしいのもそのような構造によるのである。

なるほど学習の段階に於て我々がこのように母国語をなかだちとすることは事実であるし、又適当な保留さえ設けるならばそれが能率的な近道であることも認めてよからう。しかしそのことから我々が永久にこの段階を脱すること

が出来ないという結論は出てこない。外国語の記号 α が母国語の記号 a を通じて意味 A に結びついている場合、 $\alpha \downarrow a \downarrow A$ の過程をひんばんに繰返すことによって人は遂に a をとばして α を直接 A に結びつける習慣を獲得しないであろうか。複雑さの水準に於てはるかに異ってはいるが、このような頭脳の働きの原型を我々は有名な条件反射の実験に見るのではなからうか。さらに又もし外国語の記号が必然的に母国語の記号をひきおこすとしたら、我々がよく経験する、意味が分かっていて訳が出来ないという事態はどのようにして説明したらよいのであろうか。例えば筆者がさきほどから使いたくても片仮名を並べることを恐れて使えずにいる英語がある。bilingualism がそれである。もしこの小文が英語で書かれたのであれば筆者はちゅうちょなくこの単語を用いたであろうし、他の部分は知らずこの単語だけに関して正しく用いたであろう。してみれば筆者はこの単語の意味を知っていると称することが出来るのではなからうか。しかもなお、それに対応する日本語が頭にうかばないという事態は今我々が検討している立場からどのようにして説明出来るであらうか。勿論この単語の意味を知るに至る過程において間接的にいろ／＼の仕方から者が母国語の恩恵をこうむったことは恐らく事実であらう。しかし現在の状態においてなお筆者がこの単語を日本語を通して把握しているという説明は事実と反すると言わなければならない。

人間は元来完全な意味における言語を一つしか持ちえないとして母国語と習得された外国語の間に本質的な差違を認めようとする考え方は、思考と言語を不可分とする考え方や母国語に神秘的な力を与えようとする者にとって大いに魅力的な説である。しかし例えば十二才までドイツ語を話し、それ以後英語を使っているドイツ系アメリカ人にとって母国語とは何をさすのであろうか。現在彼がドイツ語をほとんど忘れてしまっている事実が英語を母国語の地位

に置くとすれば十二才の時に彼が英語を全く知らなかったという事実はその当時彼の母国語がドイツ語であったことのより確かな証拠といえよう。それならば彼がドイツ語と英語の両方を知っていた中間の時期においては彼の母国語はどちらであったのだろうか、我々は彼の母国語がドイツ語から英語に変わった瞬間を正確に指摘することが出来るであろうか。さらに又ロシア人を父としフランス人を母とする家庭に育った子供の場合はどうであろうか、彼がロシア語を話す機会が少し多いという事実が彼の流暢なフランス語を言語として本質的に劣った従属的な位置に落してしまふであろうか。我々はなぜこの両者の差違を単なる程度の差と考へてはいけないのであろうか。

こゝにあげた例はたしかに例外的な場合である。我々は一國語のみによって育った成人が外國語を完全に習得することが極めて困難であることを否定しようとするものではない。あるいはそれは不可能と言ってもよいかも知れない。しかしそれは本来的に不可能なのではなくて彼が置かれてゐる事情によつてたまたま不可能のだと考へてはいけないであらうか。恵まれた事情と意識的な努力が賢明に行なわれるならば、一國語のみによつて育った成人が外國語を完全に習得することは有りうることではなからうか。そしてそのような完全な習得に至るまでには、さまざまの程度の不完全な習得の段階があり、そのどこにも本質的な差違を劃する一線をひくことは出来ないのではなからうか。少くとも我々は外國語を部分的には母國語の助けなしに理解することが出来ると思つて差支えないであらう。勿論我々のこのような見解は、言語をぬきさしのならない完全な体系と考へそこから一点をひいても一劃を加えても全体系が崩潰するというような嚴格主義の立場からはとうてい受入れられることの出来ないものであらう。しかしそのような言語觀については我々はすでに一言したからこゝには繰返さない。たゞ我々がこゝに簡単に外國語と呼んでゐるものが外

国語による個々の文章であることに再び注意を喚起しておけば十分であろう。

そこで我々に残された疑問は次のようになる。こゝで主張されている、意味を通さない翻訳というものは、翻訳の過程として最もすぐれた、あるいは少くとも正常なものであろうか。（以下では便宜上、意味を通さない翻訳を直訳、通すものを意訳と呼ぶことにする。）即ちこゝで我々は翻訳の多様性を認め、その中で優劣を論じなければならぬということとなったわけである。その為には必然的に、望ましい翻訳とは何かという価値の規準を設けなければならないが、そのことは即ち正しい翻訳は何かという核心をつく問題となるので、これに入るまえに直訳というものの成り立ちと性質をもう少し分析してみよう。

四

第一に注意しなければならないことは、直訳とか意訳とかいうことばは翻訳の過程に関するものであって、結果たる訳文に関するものではないという事実である。即ち直訳と意訳とは原理的に異った過程ではあるが、その生み出す結果は偶然一致する可能性がある。ある英文中に現れた *dog* なる単語の訳は直訳でも意訳でも「犬」となる可能性が大きい。（但し意訳の場合にこのような単語の訳という言い方に問題があることは後でふれる。）従って個々の訳文についてそれが直訳であるか意訳であるかを決定することは不可能であるし無意味である。我々がこゝでしようとしていることは、意味を通さないという前提からどのような帰結が生じてくるかという理論的追究と、事実直訳によって作られた訳文がどのようなかを示すに止まる。

さて直訳が成立するためには先づ二組の記号体系がすでに結びつけられているという事実が存在しなければならぬ。翻訳者はこの結びつきのルールに従って甲言語の記号 α を乙言語の記号 a に置き換えるわけである。それは例えば点字で書かれた文章を一定の法則に従って通常の文章に直すのに似ている。しかしそれならばそのような結びつきのルールはどのようにして決定されたのであろうか。記号 α は何故記号 b や記号 c でなしに記号 a と置きかえられなければならないのか。dog という英語は何故「ネコ」や「タヌキ」という日本語に置きかえられないで「イヌ」でなければならぬのであろうか。こゝに直訳の成立に関する根本的な疑問がある。

これに対する一つの回答は点字の場合の類推を貫くことであろう。即ち紙にあげられたいくつかの穴の組合せが文字を代表するのはそれがするように定められているからであって他に何の理由もなければ、必要でもない。大切なはそのルールが一貫して守られることであると。そしてこのことは点字に限らずあらゆる二次的な記号（即ち記号を代表する記号）について言われうる真理であらう。しかし我々はこの類推を翻訳に関して承認することができるであろうか。我々は翻訳の際の原文を二次的な記号とみなすことができるであろうか、常識は否と答えるであろう。何故ならば二次的な記号は一次的な記号なしには全く存在理由をもたないのに反して原文は訳文なしでも立派に存在するからである。しかし一見非常識と考えられるこのような立場も直訳の原則を貫くためには論理的な要請と考えられる場合がある。所謂「翻訳機械」の提唱者の一人である W. Weaver は一九四九年にその趣旨を説明した覚書の中で次のように書いてゐる。…… it is very tempting to say that a book written in Chinese is simply a book written in English which was coded into the "Chinese code". If we have useful methods for solving almost any

cryptographic problem, may it not be that with proper interpretation we already have useful methods for translation? 即ちこゝで考えられていることは原文を一種の暗号文とみなして、これを解読するための法則さえ見出されれば後は機械的に訳文が得られるはずだというのである。しかし問題はそのような法則が果して見出されるかという点にある。もし原文が実際に暗号文であるならばそれは必ず見出されうる筈であるが、こゝではそれは単に暗号文とみなされているにすぎない、従ってそのような法則が存在するという保証はないのである。例えば暗号解読には統計的な手段がよく用いられるようだが、言語の翻訳にそれが用いられる可能性は小さい。みやすい例をあげれば英語の動詞 *be* のような重要な単語はどの言語でもごくひんぱんに用いられるにちがいないと考えられるかも知れない。事実筆者のしらべた英国の現代劇十篇の中では現在形の定動詞中 *be* の頻度は四四%にも達する。しかるにロシア語で *be* にあたる動詞 *byt* の現在形は殊に口語では減多に出てこない形である。それはこの語が英語の *be* のように所謂コブラとして用いられることが少ないことに主な原因があるのだが、いずれにせよ統計的な見地からは英語の *be* とロシア語の *byt* は似ても似つかない存在である。さらに日本語では *be* にあたる単一の語はないと考えられる、「いる」「ある」の二つのほかに、「だ」「です」のような助動詞、さらには形容詞の終止形、いくつかの助動詞などの中にこの語に似た機能が分散して認められる。従ってこれらも統計的には *be* と類似した性質をもちえない。又逆にロシア人の考え方からすれば、疑問文を作るに用いられる *est* のような小辞はその極めて根本的な機能からも、どの言語でも普遍的に用いられるにちがいないと想像されよう。助詞「か」をもつ日本人にはこれは容易にうなずかれるが、それにあたるものを持たないイギリス人やドイツ人にはこの語がひんぱんに用いられる必然性は認め

がたいにちがいない。フランス人ならば *espace d'ne* に似たような機能を見出すかも知れない。しかし又これらの西ヨーロッパ人が、ロシア語や中国語日本語の文章の解読をしようとする場合にまず冠詞を探し求めることは大いに有りそうなことである。ことに彼がラテン語を学んだことがなければなおさらであらう。

しかし我々は Weaver のひゆにいつまでもこだわる必要はない、原文を暗号のように解読することはもし可能であったとしても著しい無駄な労力を要するにちがいない。現実に直訳が行われるための置き換えの規準となる記号と記号の結合は、やはりその成立に於いては何らかの形で意味を基礎としていると考えるのが順当である。何故なら辞書にしても会話教本にしても、その源を辿っていくならば必ずやいつか誰かの人間がどのような既成のルールに頼ることもなしに、二つの記号を結びつけたにちがいないし、その場合のより所としては意味以外に考えられないからである。

このようにして直訳といえどもその成立においては意味を除外することは出来ないということとはほぼ間違いない。それでは意訳と直訳のちがいはどこにあるかと言えば、前者においては個々の原文について一回一回にその場合の意味がまず考えられるのに反して、後者においては原文を構成している記号に何らかの方式ですでに結びつけられている訳言語の記号をたゞちに置き換えるという点に存する。従って極端に言えば訳者は原文の意味を理解する必要はない、彼に必要なのは原文の記号を識別する能力と識別された記号に対応する訳言語の記号を正しく喚起する能力とその記号を表出する能力のみである。

所で現実の翻訳においてこのような純粹な形の直訳が一貫して行われることはまず無いと言ってよからう。実際の

翻訳は多かれ少なかれ意識と直訳の混合であると考えられる。たゞ一つだけ例外と考えられる場合は、上にちよつとふれた機械による翻訳である。将来においてサイバネティックスの理論が驚異的な発達をとげ電子工学の発展と相俟つて機械による意識が可能となる日が来ないとは誰も断言できないにせよ、少くとも現在の段階で機械によつてなしうる「翻訳」なるものは全く上述したような直訳の原理、それも極めて粗雑な逐語訳の方法による他はないようである。機械翻訳に伴う技術的な問題は現在我々の関心事ではないから、これにふれることは避けなければならないが、こゝで行われることは大ざっぱに言つて原文を構成している個々の記号（さしあつては単語、語尾変化を伴う場合は語幹）を機械的な手段で識別し、あらかじめ貯蔵されているそれに対応する訳語を機械的に再生するというやり方である。このようにして作られた訳文がどのようなものであるかは極端な直訳の例として我々の興味をひくに十分であろう。左にあげる例は R. H. Richens と A. D. Booth が一九五二年の現状で考えうる（実際に機械を通したわけではない）機械翻訳の例としてあげているものの中から拝借したものである。原文・機械訳・修正訳の順である。原文中の * は同一単語における置換の単位の切れ目を示している。なお機械訳中には左のような補助的記号が用いられているがこれも原文のある単位に置き換えられている点で訳に似たものである。斜線は原文中の一単位に対して二つ以上の訳が貯蔵されている場合に第二、第三の訳の前に加えられ選択を示す。

(d dative, g genitive, m multiple, plural or dual, n nominative, p past, q passive, v vacuous, z unspecific)

FRENCH

Il n'est pas étonnant de constater que les hormones de croissance agissent sur certaines espèces, alors qu'elles sont inopérantes sur d'autres, si l'on songe à la grande spécificité de ces substances.

v not is not/step astonish *v* of establish *v* that/which? *v* hormone *m* of growth act *m* on certain *m* species *m*, then that/which? *v* not operate *m* on of other *m* if *v* one dream/consider *z* to *v* great *v* specificity of those substance *m*.

It is not surprising to learn that growth hormones may act on certain species while having no effect on others, when one remembers the narrow specificity of these substances.

GERMAN

Wenn in einem grösseren Gebiet zwei Formen nebeneinander leben, ohne sich zu vermischen, so gehören sie verschiedenen Formengruppen an.

if in a/one *d* large (more) area two form *m* beside one another live *z* without self to/too mix *z*, so belong/hear *p z z* different *m* form *m* circle *m* at.

If, in a largish area, two forms coexist without intemixture, they will belong to different form-cycles.

SPANISH

El estudio de la distribución de las temperatura*s mínim*as annual*es, como es obvi*o en tod*o trabajo, supedit*a su justeza a la densidad de l^{rs} estacion*es y al record de observacion*es de cada una de ellas.

v study of *v* distribution of *v* temperature *m* minimum *m* annual *m* as is obvious *v* in all *v* work. reduce *v v* justification to *v* density of *v* station *m* and to record of observation *m* of each a/one of *v*.

The study of the distribution of the minimum annual temperatures, depends, as is obvious for all work, on the density of the stations and on the record of observations of each one of them.

JAPANESE

この *耐* 寒 *性* の *差異* は *四倍体* が *二倍体* に *比* し *滲透圧* が *高* く *な* っ て *ゐる*
ことも *大* き *な* 原因 *と* 考へ *ら* れる。

this endure cold sex/disposition *g* difference (as for) tetraploid *n* diploid (at) sort/compare do/also
osmotic pressure *n* high (adverb) becoming is fact *v* large reason with/when consider *q*.

It is thought that the resistance to low temperature of the tetraploids when compared with the
diploids may be largely due to the higher osmotic pressure of the former.

(右の例文中日本語の原文は漢字とかなを区別した特殊なローマ字で表記されているものを筆者の解釈で通常の書き方に復元したものである。)

原論文の筆者達が注意しているように、この例中では必要以上に「*n*」などの記号を用いて訳語を節しているし、個々の言語についてよく研究すればなお改良の余地は現状のまゝでも多くあることは明らかであるから、これらをもって機械翻訳の達しうる最高の水準と見なすことは勿論当を得ていない。むしろ我々はこの程度の直訳でも例えばスペイン語の場合のようにかなり意味のとれる訳になる場合があることに驚嘆すべきであるかも知れない。しかしそれにかゝわらず、このような場合をも含めて、こゝには直訳に伴う幾多の難点が顕著に現れていることは否定できない。

今我々はそれらを出発点として直訳全体についてやゝ具体的な再検討を加えて見よう。

五

第一に問題となるのは置換えの単位が何であるかという点であろう。我々は直訳の基本条件として記号と記号とが結びつけられていることを要求したが、この場合の記号とは具体的には何をさすのであろうか。右の訳例中ではドイツ語の *Formenkreisen* という単語は四つの単位に分けられて *Form—form, en—m, kreis—circle, en—m* という四組の対応をなし、日本語の「耐寒性」は *耐—endure, 寒—cold, 性—sex/disposition* と三分されている。このように置換えの単位を小さくすることは機械翻訳の立場からは操作を簡単にし、かつ貯蔵すべき語彙の数をへらすという効用があるが、他方翻訳本来の目的である意味の伝達という点で著しい欠陥が生ずる恐れがある。*endure cold sex/disposition* を正しく理解する人が何人いるであろうか。又これと逆に単位を大きく取るとは、意味の伝達においてすぐれているかわりに置換のための操作を著しく困難にする。例えばフランスの *ne pas* を *not · not/step* と二分せずに一まとまりの記号とみなして *non* に置換えられるならば訳文はずっと理解しやすくなるであろうが、そのためには「翻訳機械」は逐語訳の段階を超えなければならぬ、即ち新しい技術上の工夫が必要とされるわけである。

同様の事情が通常の翻訳においても存在する。人間の頭脳は所謂電子頭脳やパンチ・カードに較べてはるかに複雑な操作ができるし、必要に応じて辞書をしらべることが可能ではあるが、直接的に結びつけうる、即ち丸暗記できる記号の単位はせいぜい単語（語形変化のある場合はその代表的な形、又は語幹、但し *rosa, rosae, rosae, rosam, rosa*

などとバラダイムとして暗記させられた少数の語は例外」と極めて限られた数の成句（例えば good morning——オハヨウの如き）程度であって、無限に近い数の可能な組合せをもつ文章をすべて暗記することは不可能であるし、その組合せの大部分は実際に使われないものであるにしてもどれとどれが実際に使われるかをあらかじめ決定することもできない。従って直訳による訳文は必然的にてんでんばらばらの訳語の羅列となる。そしてこの羅列が理解しうる意味をどの程度有するかは一つには原言語と訳言語との記号の竝べ方の約束が似ているかいけないか（右の訳例中スペイン語の場合と日本語の場合を参照）と訳語が適切であるかないかに依存する。

しかしこのようなてんでんばらばらの訳語も文法の規則に従って竝べかえられれば十分意味の分る訳文になるのではないかという反論が提出されるかも知れない。これに対しては二つの点から重大な疑問が生ずる。第一に原文の所謂文法的構造なるものが意味を考えないで決定しうるか否かの問題がある。少くとも決定しえない場合があることは事実であるように思われる。第二に与えられた訳語を並べかえるだけで果してうまく訳言語の文章になるかどうか、形の上で文章になったとしてもそれが意味をなすかどうかという問題がある。例えば「腹を立てる」「恥をかく」のような日本語の成句を単語ごとに英訳して単に語順だけを英語式にかえても意味は通じないであろう。これらの困難はすべて文章以下の単位が置きかえの単位となっていることから生ずると考えてよいであろう。

機械訳が提示する第二の難点は目ざわりな斜線が象徴している。即ち原文の一つの記号に対して一つの、あるいは一組の記号を対応させるだけでは不十分であるために二つ以上の、あるいは二組以上の記号をあげている点である。直訳の原則を貫くために記号の対応が一对一でなければならないということはないが、問題は与えられた二つ以上の

訳語のどちらを選択するかで果して訳文の内部のみで決定しうるかどうかにある。殊に同一の文章中にそのような選択が二つも三つもある場合に正しい選択に達するのはむしろ幸運に属すると考えるべきではなからうか。そしてもし選択が原文の意味を考えてなされるならば、すでに直訳の原則は裏から破られていると言わなければならない。

しかし仮にこのような困難が克服されたとしても、一対一の対応と一対多の対応とはそこに根本的な差違があることは明らかである。こゝではすでに点字のひゆは全く通用しなくなってしまう。点字文に対する通常文が平行光線による投影であるならば、原文に対する訳文は乱光線による極めて漠然とした陰影となってしまう。そこにはすでに体系と体系との対応はなく入り乱れ交錯した複雑な関係が存在するのみであろう。

それならば何故このような事態が生じなければならないのであろうか、何故一対一の対応は保持されえないのであろうか。我々はこゝで再び記号と記号の結びつきの根拠を問題としなければならなくなる。我々はすでにそれが結局は意味に依存することを指摘した。しかしその場合の意味とは何をさすのであろうか。直訳の場合のように個々別々に切離された言語断片に意味があるであろうか。もし有るとしたらその意味は一つであらうか二つ以上であらうか。もし二つ以上であるとしたら、それはどのようにして数えることが出来るのであろうか、それらの意味と意味の間は途切れているのであろうかつながっているものであろうか。我々はこれらの問題について内容的な答えを出すことはできない。何故ならばこれらの問題は何ら事実的な内容をもたないからである。我々に言えることは我々がある言語記号がどういう場合に用いられ、どういう場合に用いられないかを過去の記憶から知っているという事実だけである。そこで今仮りにそのような用法の総体を言語記号の意味と考えるならば二つの言語記号の意味が同一であるといふこ

とはその用法が同一であるということになる。しかし二つの異った言語に属する二つの記号の用法が同じであるということは有りえないことではないにしてもかなりまれであると考えなければならぬ。ある記号の一言語における用法は種々の歴史的な偶然によって習慣的に決定される面が非常に大きいからである。例えば英語の *man* という語と日本語の「オトコ」という語をくらべた場合その用法は一部分重なり一部分重ならないことが分る。*Man is mortal.* という英文の意味を「男は死ぬもの」という日本語で表わすことはできないし、「男がすたれる」を *Man will be ruined.* とも言えない。 *man and wife* を「男と妻」と訳せば三面記事を連想するし、 *Like master like man.* の *man* も「男」ではまずい。又「男まさり」や「男前」などの「男」も *man* では表わしにくい。まして呼かけの *man* とか「*Man alive!*」という間投詞的用法は「男」にはな。一方 *man-to-man talk* と「男同志の話」 *like a man* と「男らしく」などは似たように用いられる。*young man* を「若い男」はよいが *old man* を「年取った男」はしっくりしない場合が多い。しかしそれならば英語の *man* は日本語の「人」「男」「夫」「従者」の四つの語に対応するかと言うともうでもない。そのどれもが *man* にはない用法をもっている。逆に日本語の「男」が英語の *man, reputation, appearance, lover* などにあたるとも言えない。それぞれの特殊な用い方にあたることがあるというだけである。しかもそのどれにもあたらない場合はいくらでも出てくる。このような事情を考えると一つの記号に一つでなく二つ三つの訳語を結びつけておいてもそれで十分だと言えるかどうか疑わしいし、又たとえ十分であるとしてもそれぞれの訳語に訳言語中での独自の用法があるから無条件でそれらが用いられるとは限らない。「男と妻」のように別の意味が加わるかも知れないし、「年取った男」のようにもっと簡単なすぐれた訳があるかも知れない。一つの単語には一つ

の中心的な意味があつて他の意味はみなその特殊な用法にすぎないという説があるが、たとえその中心的な意味なるものが何らかの方法で決定されうるとしてもそれがどのような特殊用法を許すかは慣行の問題であつて理窟で決めるわけにはいかない。こゝが言語記号と論理学でいう概念のちがひである。man が「人間」を意味するとすれば「男」はその特殊用法と考えられる、ところが同じく人間に属する「女」という意味には用いられない。「男が」「夫」の意味に用いられるのが特殊用法であるならば、なぜ「父」や「兄」に用いられないのであろうか。「従者」が男であるならば「主人」も男である。従つてたまたま中心的な意味が一致する二つの記号が見つかったとしてもその特殊用法が一致することの保証はない。

この困難は概念的な意味を殆どもたないで他の記号間の関係や意味の修正などの機能のみを果しているような記号に於てはなおさら大きい。それらに何か定まった訳語が与えうるか否かは、問題となつてゐる二言語に似たような機能をもとめて表現する言語形式があるかないかという偶然に全く依存すると言つてよい。勿論事物の間の時間的空間的關係、意味の間の論理的關係などはすべての言語に於いて何らかの方法で表現されているにはちがひないが、それをどのように把らえ、どのように表現するかは各言語の習慣によつて異り、かつ、すでに言語記号として存在している以上、事実や論理とは無關係に言語記号としてのその言語内における拘束をうける。例えばさきにあげた機械訳の例中で、フランス語の *que* は *that/which* に置換えられている。たしかに *que* のある用法が *that* のある用法に似ていることは認められるかも知れない。しかし *that* が意味をもつのは文章中にある位置を占めることによるのであるから、この置換えが成功するのは英語の訳文のならび方がたまたま *that* のそのような使用を可能にするよう

な形になっているからである。しかしこの並び方は又同時にもう一方の訳語 *which* の選択をも可能にしていることに注意しなければならない。他方 *que* の方はこの場合疑問詞と考えることはできない。また二つ目の *que* は *alors* と連結して特殊な意味をもっていて英語の *that/which* で置きかえられない。 *ne... que* というような連結の場合も同様である。それでも何でもとにかく *que* が *that* 又は *which* で置き換えられて意味をもちうる場合があることは事実であるが、日本語の「と」の場合はどうであろうか。原文で「……と考えられる」の「と」を訳文は *with/when* で置き換えている。勿論我々はこれに第三の選択訳を加えなければならぬと主張してよからう。そしてそれは *with/when* の筆法でゆけば *that* ということになるかもしれない。しかし訳文のこの場所に *with/when/that* のどれを置いて見た所でそれに何らかの意味が考えられるであろうか。全く考えられないか途方もない誤解をおこすだけであろう。日本語の「が」の場合には機械訳は訳語を与えるのをあきらめて、*ミ*なる記号でかえている。「が」のような重要な機能を有する言語形式に対応する形式がないという事実はそれだけでも記号と記号の直結がいかに困難であるかの証左と言えよう。

しかしこれらの事実にも拘らず直訳的方法が全く無益であるとは言い難い。科学上の専門用語を含むかなり多数の、しかし使用度の低い記号はその用法が極めて限定されておりそれが言語外の事実との関連において極めて明確に定義されている故に、これらの記号については殆ど完全に用法が一致する訳記号を見出しうる場合がまれではない。その場合に記号と記号を直結しておくことは非常に有益であると考えられる。機械翻訳がさしあたっての目標として科学論文の翻訳をかゝげていることはこの点からも賢明であると言わなければならない、また、さきにもちよつとふれた

が、問題となつてゐる二言語が何であるかによつて直訳の有用性が異なることも事實であると考えられる。日本語の訳例とスペイン語ないしドイツ語のそれを比較してみるならばこのことは或程度納得されよう。所で直訳における最後のそして恐らくは最も重大な問題が残つてゐる。それはこうである。直訳において置換えの單位が都合よく決定されそれぞれの原記号に対応する訳記号が見出されさらにそれらが都合よく訳言語の文章に並びかえられたとしても、その訳文が全体として原文の意味を伝えてゐるという保証はない、なぜならば言語活動に於いて個々の言の意味は言語記号のみによつては決定されないからである。例えば *fire* という英文を「火事だ」と訳すか「撃て」と訳すかは單獨には決められない。こゝに到つて我々は個々の言の意味とは何であるかという問題に直面せざるを得ない。即ち訳の根本問題に達する。

六

さて我々は我々自身の仮定へと戻らなければならない。それによれば翻訳の過程は次のように説明される。訳者は原文を理解し、その意味を原文から切離して、それを訳言語の文章で表現する。即ち原文と訳文は直接結びつけられるのではなくてその間に意味が介在することによつて始めて結びつくと考えられるわけである。

さてこのようなことが行われうるために絶対に必要な一つの条件がある。それは訳者が原言語と訳言語の双方に充分習熟してゐるということである。これは極めて当然のことではあるがこゝに翻訳のすべての秘密がかゝつてゐると言える。各々独自の体系として考えられた場合にはどのようにしても結びつけられないように思われる二つの異つ

た言語が個々の言においては相互に置き換えられようとすればそれは実に同一の人間が二つの言語を同時に理解することができるといふ事実によってのみ可能なのである。こゝで一人の人間の頭脳に二つ以上の言語「体系」がどのような形で共存するかといふことは我々の問題ではない、我々にとって重要であるのは一人の人間が異った記号体系を用いる二種以上の言語活動を営みえ、しかもなお人格の統一を失なわないといふ事実を承認することである。さてこの根本前提を明らかにしておいて、我々は次の問題に移らう。

我々の考えている翻訳の過程を少し詳細に検討してみようとすると思ひに於て「意味」といふ言葉につきあたる。既にことわつてあるように我々はこの言葉を便宜のために極めて漠然とした意味に用いてきたのであるが、意識、即ち我々の理解する「翻訳」の問題を正面から取り上げようとする際にこのような便法はもはや許されえない。我々が「意味」といふ漠然としたことばで呼んでおいた事態をこゝで今少し具体的に考察しなければならない。但し注意しておかなければならないことは我々が今なそうとしていることは「意味とは何ぞや」といふ質問に答えることではない。「意味」そのものも一つの言語記号にすぎないのであるからこの質問は「意味の意味は何か」といふ質問に等しい。所がこの質問に答えるためには二つ目の「意味」といふことばの意味をあらかじめ知らなければならぬ。このようにして質問は無限に後退するのみであろう。また我々が意味といふことばを用いたからと言ってそこに何か単一の実体が存在するとも一定不変の關係が成立しているとも保証されたわけではない。我々はまだ分析されず確認されていない事態ないし過程を仮に意味と呼んでおいたのであつて、それを分析し確認するのが今なそうとしている試みである。

さて我々の前提によれば訳者は原文を理解することが出来る、そして彼が原文から理解しうるすべてが我々がその意味と呼んだものである。それでは訳者は原文から何を理解するであろうか。それは種々雑多なものであって決して言語学の入門書に図解されているような簡単なものではないし、原文の一つ一つについてその複雑さも理解の深さも異っていて一定の公式で表わしうるものでもない。従って意味を単一のあるいは一定不変のものとして決めてかゝっている言語理論は必然的に事実を不当に単純化していることになる。我々にできることは、場合によっては訳者によって理解されうる事柄をできるだけ列挙することとそれらを理解の深さに応じて配列することである。所で原文の理解の段階においては訳者の活動は通常の言語活動における聞き手（または読者、以下同じ）の役割と何ら異ならないからこの段階での説明は一般的なことを用いることとする。

聞き手が理解する第一のことは話し手（または筆者、以下同じ）が何かを言っている（または書いて、以下同じ）いるという事実である。理解がこの段階でとゞまることはまれであるが絶無ではない。例えば話し手が何か言っているのだがよく聞きとれないとか、手紙の文字がかすれて判読できないとかいう場合がそれにあたる。

聞き手が理解する第二のことは話し手がどの言語記号を用いているかということである。理解がこの段階でとゞまるのは概して聞き手に与えられている情報が不十分である場合が多いが、例外的には狂人のことばとか、寝ぼけなどがある。他人同志の会話の断片が聞える場合もこれにあたる。勿論記号が識別される以上聞き手はその記号の用法ないしは所謂中心的な意味を反省によって思い起すことが出来るが、通常の言い方ではこの段階ではまだ「意味」が分つたとは言われない。例えば火事の最中に「クジラ」ということばが聞かれても我々はその意味が分つたとは言われない

であろう。この段階に付随して反省によって理解される事柄の中には記号の並び方とか発音（又は文字）の特徴などがある。

次の段階は記号の間の関連を理解することである。これは通常次の第四の段階と相俟って行われるものであるが場合によっては言語内部の約束だけで決定されることも少くない。即ちこゝでは所謂文法的な構造や論理的な関係の一部が理解される。そして理解がこの段階で止る場合は前の第二の段階においてあげたのと同様の場合であり、文法的な構造も記号の一部と考えられるから、本質的にはこれも記号の識別の段階と考えられる。たゞ異っている所はそれが単一の記号ではなくて記号の複合体であり、記号相互間の拘束によってそれから理解されうる内容がかなり局限されてくることである。

第四の段階は記号が何をさしているか、即ち話し手が何について語っているかを理解することである。この理解には与えられた言語記号以外の要素が絶対に必要である。話し手が誰であるか、何を知っているか、どこにいるか、何時であるか、何をしているか等々。要するに言語活動が行われている場、というものが記号によって表わされているものを決定するために不可欠である。しかしながらこれらの事実に関する知識はいわば無限に拡大しうるものであってどこまでという限度を設けることもできないし、また個々の場合にそのすべてが記号の理解に関連性を有するわけではない。また記号がすべて具体的にそれと指し示しうるものを表わしているということは少しも保証されてはいない。しかしこの場合にも何も具体的なもの、あるいは事態を指していない、ということを知るために場の知識が必要であることは言うまでもない。さて理解がこの段階に達すれば人は安んじて言の意味を知ったと言いうるであろうが、しか

し理解はこの段階に止るものではない。

理解の第五の段階は話し手の発言の直接の意図がどこにあるかということに関するものである。言語活動は広く人間の有目的の行動の一環をなすものであるから何らかの動機または目的をもって行われるのが普通である。しかしある行動の目的は見方の水準によって幾重もの段階に分れうる。例えばある人が知人の許を訪れて最近見た映画の話をして帰ったとする。この場合の彼の言語活動の目的は自分の受けた印象を相手につたえることであるとも言えるし、その知人との親密さを増すためであるとも言えるし、機会をみて彼から有利な取引を世話してもらうためであるとも言えるし、従って生活してゆくためであるとも言える。しかし我々にとって問題となる話し手の意図とは彼が一回一回の発言で一回一回に達成しようとしている目的である。通常の会話において聞き手はこの意図を理解することによって、ある場合には答え、ある場合には笑い、ある場合には立って行って窓を閉めるのである。勿論話し手が一回々々の発言の目的をはっきり意識しているとは限らないし、意図が二重三重である場合もある。しかし何らかの目的が存することは聞き手がそれを理解しなかったり又はそれに応じない場合に話し手の感ずる不満によっても明らかである。このような話し手の意図は明確な形で把らえがたく、分類することはあまり意味がないかも知れないが次のような場合が考えられる。感情の表出——これは聞き手を予想していない単なる発声であるが聞き手はそれによって話し手の感情を知る場合がある。話し手の意図はゼロに近い。話しかけ——朝晩のあいさつとか呼びかけなど聞き手に単に話しかけて自己の存在を注意させたり、会話の皮切りとしたり、無言でいることの気まずさを救ったりする程度の意図。告知——何かの情報を聞き手に与えようとする場合とすでに聞き手が知っているが閉却されている事実を強

調する。自己の感情や意見を知らせて何らかの意味で聞き手の心に影響を及ぼそうとする場合もある。要求——質問や命令によって聞き手に何らかの明確な応対を要求する。

これらのそれ／＼には意図の強さや複雑さによってさまざまの段階や変形がありまた二つ三つの意図が重なる場合もあって簡単ではないが何らかの告知や要求を含む言においては話し手が何を知らせようとしているか、何を求めているかが言の理解の中核をなす点だと言つてよからう。

さて以上理解の段階を仮りに五つに分けたがその相互の境界は必しも明確ではないし、一つにまとめられた段階の中にもさらに様々の理解の程度があるが、概して言えることは高次の段階の理解には低次の段階の理解が前提となる一方低次の段階の理解は高次の理解によってより確実になるということである。また高次の段階の理解が達成されれば低次の段階の理解は意識されなくなる傾向がある。このことからして我々は高次の段階の理解は低次のそれよりも重要であると考ええる。

以上のすべてを我々は言の意味と呼ぶわけであるがこれは通常の用法と多少異っている点もある。例えば「太郎が花子をぶった」ということばは「花子が太郎にぶたれた」と同じ意味だと文法家や論理学者は言うかも知れない。しかし我々の第二、第三段階ではこの二つは同じではない、用いられている記号とその配列がちがっている。我々の第四段階ではこの二つは同じだと言つてよからう。第五段階になるとどうであらうか。話手の意図がただ単に事実の告知であれば二つは同じと考えてよいが、その意図が前者では太郎に対する非難、後者では花子に対する同情の氣持を告知しようとする所にあるならば二つは明らかにちがっていると言わなくてはならない。

七

さて以上が訳者が原文から理解するところのものであるとして次に問題となるのはいよいよ翻訳の本体である訳言語による表現の段階である。我々は翻訳も一種の言語活動であると認めたがこの言語活動の目的はどこにあるのであろうか。訳者は自分が原文から理解したものの中のできるだけ大きな部分を読者に伝えようとするであらう。しかしその際に彼はそれを読者に告知するのではない、即ち彼はみずから読者に語ってはいけないのだ。こゝにこの言語活動の特殊性が存する。彼の目標は原言語を知らない読者が訳文を読んだ時に彼自身が原文を読んで理解するのと同じものを理解するようなそういう訳文を作ることにある。読者はそれより多くを理解しても少くを理解してもならない。従って訳者自身はいわば無色透明でなければならぬ。彼の仕事は伝達ではなくて再現であるのだ。

翻訳の目的をこのようなものと考えるならば、いかなる翻訳がすぐれているかは少くとも理論的には決定されうる。しかしこゝで注意しておかなければならないことは実際に翻訳のよしあしを決定するには一つ必然的な困難が伴う点である。それは判定者が原言語と訳言語の双方を知らなければならぬという条件と訳者の目標とする読者は原言語を知らない人であるという条件が矛盾するからである。しかしこれは本題をそれるからこれ以上ふれない。

翻訳の理想は原文から理解されるすべてが、そしてそれだけが理解されるような訳文を作ることであるとしてもそのような理想は果して実現されうるであらうか。現実の翻訳において我々は幾多の困難に直面する。それらの困難のうちであるものは訳者の力量の不足に原因を求めうるであらうがいくつかのものは必然的な原因によると考えられる。

そこで我々はそのような必然的な困難について考えてみなければならない。

原文の理解に我々は五つの段階を設けたが訳文の理解についても同じことが当然設定されなければならない。そしてそのすべての段階において同一のことが理解されるならば翻訳は完全であると言わなければならない。しかしもしそれが不可能であるならば訳者は高次の段階での一致を重視しなければならない。そのために低次の段階での一致を犠牲にしなければならない。所で理解の第一段階に関しては殆ど問題はない。たゞ理解がこの段階で止るというまれな場合に多少の問題が生じうる。その場合原文の形をそのまゝ訳文に再現すればよいのであるがそれがたまたま訳言語の何らかの記号と一致すると第二段階以上の理解が可能となるからそれを回避しなければならない。原文の中に他の外国語が入っている場合はさらに厄介な問題が生ずる。これも通常原文のまゝの形で訳文に入れゝばよいのであるが、たまたまその外国語が訳言語そのものである場合は翻訳不可能と言わなければならない。

理解の第二段階は通常翻訳不可能である。なぜならば原文において識別される記号がそのまゝ訳文において識別されることはよほどの幸運によって両言語に同一の記号が存在しないかぎり不可能であるから。たゞ幸いなことにこれより高次の理解がなされる通常の場合にはこの段階の理解は無視されうるから、これによって翻訳全体が不可能とはならない。問題が生ずるのは次の二つの場合であろう。第一には理解がこの段階に止る場合である。この場合には記号の形態の面を無視して、なるべく近似した用法をもつ訳言語の記号を置換えるという便法が是認されなければならない。即ちこの場合には直訳が正当化されると考えられる。第二の場合は原文において明らかに意図されている告知の内容がある記号そのものを問題としている場合である。この場合も偶然の一致がない限り翻訳不可能と考えられる。

次にあげるドイツ語からの翻訳の例では英訳の方にこの幸運な解決がみられる。

《Dann gibt es einen Konflikt—!》Herr Köppen stieß zornenbrannt das Öneue auf den Boden. Er sagte 'Konflikt' und stellte jetzt alle Vorsicht in betreff der Aussprache hintan.

英訳

Herr Köppen flung down his cue. 'Then there will be a conflict,' he said heatedly, forgetting to be careful with his pronunciation.

和訳

「さうなると、いよいよ衝突だ!——」ケッペン氏は真赤に激してキューを床に突き立てた。彼は衝突(Konflikt)を“Konflikt”と言ったがもう発音などは一切お構ひ無しといふ調子だった。

和訳では翻訳をあきらめて訳者が姿を現して説明を加えている。また次の英訳の例では右と同じ訳者が翻訳の空白を作らないために創作を加えている。

《Alle Achtung! Diese Weitläufigkeit, diese Noblesse……ich muß sagen……》Herr Köppen war noch nicht lange reich, stammte nicht gerade aus einer Patrizierfamilie und konnte sich einiger Dialektswächen, wie die Wiederholung von „muß ich sagen“, leider noch nicht entöhnen. Außerdem sagte er, Achtung statt Achtung.

英訳(一部補正)

“Our best respects ! Such plenty, such elegance ! ... I must say ...” Herr Körpen did not come of a patrician family, and had only lately become a man of means. He could never quite get rid of certain vulgar trick of speech—like the repetition of ‘I must say’ : and he said ‘respects’ for ‘respects !’

次の例の中の small-talk では理解の第一段階と第二段階のどちらに問題があるか判明でない。外国語の記号に原文中で説明が加えられているからである。英訳の例は事もなげに原文の形を再現しているが、*по-английски*（英語で）という原文の説明があるために救われている。和訳の例では直訳で失敗してゐる。

——Расскажите нам что-нибудь забавное, но не злое.—— сказала жена посланника, веркая мастерица изыщного разговора, называемого по-английски small-talk, обращаясь к дипломату, тоже не знавшему, что теперь начать.

英訳

‘Tell us something amusing, but not spiteful,’ said the ambassador’s wife, an adept at that art of polite conversation which the English call ‘small talk’, turning to the attaché, who was also at a loss for a subject.

和訳

「毒気のない、何か面白いお話を伺はせて下さいませよ」と英語で一口話と呼ばれている、華やかな談話にかけての非凡な才をもっている公使夫人は、自分と同様どう話を切り出していいか分らずにゐる外交官の方へ振り向いて言

った。

「英語で一口話」というのは仮に「一口話」の訳が正しいとしてもやはり奇妙と言わなければならない。

この段階に関して特殊な困難を呈示するのは詩の翻訳である。詩と限らず、すべて記号の形態（音または文学）と内容が共に話し手（詩人）の意図する告知の不可欠な部分をなしている場合、原言語と訳言語の記号の偶然の一致がない限り翻訳は不可能である。勿論形態を犠牲にして翻訳することは出来るがその訳文はもはや原文から理解すべきものの重要な部分を欠いており、原文が詩であると同じ意味では詩であり得ない。又内容の一部を犠牲にして訳文に詩の形式を与えることも試みられるがそれはもはや半分は訳者の創作であり、従って結果はたまたますぐれた詩ではありえても、すぐれた翻訳ではありえない。殊に詩形の伝統において著しく異っている二言語間ではこのような試みをなすことが原詩の紹介という面ではどの効果を有するかは非常に疑問であり、中途半端な試みで原詩について誤った印象を与えるならば、散文訳よりもかえって悪い結果を生むことも考えられる。何故ならば後者が少くとも原文の一面をかなり忠実に伝えることができるのに対して、前者はその何物も伝えないことがありうるからである。次のドイツ語（ゲート）とイタリア語（ダンテ）からの英訳を較べてみるならば詩形を保存しようする努力が原言語の性格によっていかに異った結果を生むか明らかであろう。ダンテの訳者のテルツァ・リマを保存しようとする涙ぐましい努力にも拘らず、母音の重畳したイタリア語の朗々たる響きは到底英語にうつすことはできない。せめてのびのびとしたブランク・ヴァースにでも訳したならばかえってよかったのではなからうか。

Ich grüße dich, du einzige Phiole,

Die ich mit Andacht nun herunterhole !
In dir verehr ich Menschenwitz und Kunst.
Du Inbegriff der holden Schlummersäfte,
Du Auszug aller tödlich feinen Kräfte,
Erweise deinem Meister deine Gunst !
Ich sehe dich, es wird der Schmerz gelindert,
Ich fasse dich, das Streben wird gemindert,
Des Geistes Flutstrom ebbet nach und nach.
Ins hohe Meer werd ich hinausgewiesen,
Die Spiegelflut erglänzt zu meinen Füßen,
Zu neuen Ufern lockt ein neuer Tag.

終

You I salute, you flask of virtue rare,
That now I hand me down with reverent care ;
In you I honour human wit and art,
You very spirit of the opiate flowers,

終

You distillation of the deadly powers,

Show to your master now your gracious heart:

To see you, touch you, soothes my strife and pain.

I hear a call towards the open main,

My tide of soul is ebbing more and more.

Lies at my feet the shining, glassy plain,

A new day beacons to another shore.

引用の第七、八行を英訳では一行につめてゐるためヤ／＼こましくなっているが押韻の自然さがその埋め合わせを
つてゐる。

Nel mezzo del cammin di nostra vita

Mi ritrovai per una selva oscura,

Che la diritta via era smarrita.

Ah quanto a dir qual era è cosa dura

Questa selva selvaggia ed aspra e forte,

Che nel pensier rinnova la paura!

Tanto è amara, che poco è più morte:

Ma per trattar del ben ch'ivi trovai,
Dirò dell' altre cose ch'io v' ho scorte.

英訳

Midway this way of life we're bound upon,
I woke to find myself in a dark wood,
Where the right road was wholly lost and gone.
Ay me ! how hard to speak of it—— That rude
And rough and stubbron forest ! the mere breath
Of memory stirs the old fear in the blood ;
It is so bitter, it goes nigh to death ;
Yet there I gained such good, that, to convey

The tale, I'll write what else I found therewith.

原詩行の十一音節を十につめても単音節語の多い英語では原文にない余計な文飾を加えなければならず、韻を合わせるためには原詩行の終りにある自然な休止を無視して不規則な繰越し行によって行末に苦心の単語を揃えなければならない。しかも押韻はまことに苦しい。もし繰越し行のある方が動的でよろしいという人があるならば、原文よりすぐれた訳文は悪訳であると答える他はない。また翻訳において等量の移植ということが無意味であることも以上によ

っても明らかであろう。

理解の第三段階における翻訳の問題は本質的には第二段階のそれと同質のものである。より高次の段階の一致によってこの段階の不一致が無視されうることも同様である。たゞしこの段階では言語間の一致の可能性が偶然にせよ、そうでないにせよ第二段階におけるよりは大きいことは事実であるように思われる。従って関係する言語の如何によつてはこの段階での直訳はさして困難でない場合がある。もっとも理解がこの段階で止めることはめったにないと考えられるから、困難が生ずるのは次のような特殊な場合に限られよう。それは発話が話し手の意図に反して途中で途切れてしまった場合である。この場合訳文の読者もまた話し手が何かまとまった内容を言おうとして途中で切られたのだということを記号の連関の特異な形態によって理解しえなければならぬ。しかも原文から推測しうる程度の話し手の意図が訳文からも推測しえなければならぬ。所が原文で時間的に前にくる部分が訳文でも前にくるということ、は少しも保証されてはいない。こゝに困難が生ずる。英語からの例をあげよう。

WILLY, *angrily*: What're you talking about? With scholarships to three universities they're gonna
thunk him?

BERNARD: But I heard Mr. Birnbaum say——

WILLY: Don't be a pest, Bernard!

和訳

ウィリー (怒って) 何を喋舌ってるんだい。三つの大学に奨学金で行かせる契約をしてゝ学校ってところは落第させ

るっていふのかい。

バーナード　でも、先生から聞いた……

ウィリイ　うるさいぞ、君。

この例ではバーナードのことばの途切れが巧みに表わされているが、次の例ではどうか。

WILLY, *going over to Linda*: I'll make it all up to you, Linda, I'll——

LINDA: There's nothing to make up, dear. You're doing fine, better than——

WILLY: *noticing her mending*: What's that?

LINDA: Just mending my stockings.

和訳

ウィリイ　（リンダの処にゆき）ねえ、リンダ、きっと埋め合せをしてやるからね、きっと……

リンダ　埋め合せだなんて、別に。ちゃんとやっていらっしゃるぢやありませんか、いつだって……

ウィリイ　（繕ひ仕事をみとがめ）何だい、そりゃ？

リンダ　ストッキングの修繕。

リンダの *better than*——は後に何がつづくか必ずしも断定しえない。ヨーロッパの多くの言語であつたならば、これは直訳で切り抜かれる所であろうが日本語ではこれに当るべき部分は切られた部分の後にくるはずであるからそれもできない。「いつだって……」の訳は殆ど創作と言わなければならぬが、落度が訳者にあるわけではない。全

くやむを得ない結果である。

理解の第四段階に到ると我々は半ば記号の束縛から解放される。我々の注意は記号そのものから、個々の言において記号のさし示している事実や関係に向けられる。翻訳はそれらの事実や関係を訳言語の記号を用いて表わせばよいのであって原言語の記号に対しては責任を負わない。こゝにおいてはじめて真の意味の翻訳が可能となるはずである。しかしこゝにおいても記号の束縛をうけなければならない場合がありうる。それは原文において一つの記号が同時に二つ以上のものをさし示す場合である。即ち記号の多義性が意識的に利用される場合である。隠喩と呼ばれる修辭的技巧もそれであるし、日常の成句にもそれはひんばんに認められる。かけことば、地口のたぐいでは話し手の意図の中心的部分をさえ構成する。これらが翻訳されうるか否かは訳言語に同じ二つ以上のものを同時にさし示す記号が存在するか否かにかゝっている。そしてたしかにその可能性は形態と用法全体の完全な一致よりはるかに大きいし、単なる偶然にのみよるわけではなくて何らかの必然性をもつと考えられる場合が多いが、それにしてもやはりそのような記号の存在はいささかも保証されてはいない。外国語の笑話が訳しにくいのはこのような原因によることが少なくない。次の珍文法問答などはどうであろうか。

TEACHER: What is the objective of *he*?

PUPIL: Her.

こゝでは objective なる語の二重の用法が問題となるのだが、また *he* および *her* については第二段階の記号の識別も翻訳を困難にしている。詩の翻訳が困難である原因の一つも詩人が意識的に記号の多義性を好んで利用する点に

ある。詩程ではないにしてもこの問題は文学作品全般についても存在する。幸か不幸か小説の文体が次第に直裁簡潔になっていく傾向があることは翻訳家にとっては有難いことであるとも言えるし腕のふるい場所がなくなっていくことでもある。

所で以上のような困難は比較的特殊な場合であると言えるが、この段階で翻訳を困難にする、より一般的な事情が存在する。それは原文そのものに原因を求めうる場合と訳言語の原言語に対する相対的欠陥に問題がある場合とがある。前者は次のような場合である。

即ち原文に用いられている記号がその場合に何をさしているか分らないのにしかも前後関係等から話し手は明らかに何かをさしていることが理解される場合である。話し手が不注意にことばを用いる場合とか、實在しない事物や関係を實在するが如くに信じ込んでいる場合などにこのようなことが起りうる。このような場合に翻訳が不可能であるのは訳者の責任ではない。勿論我々は訳者の原言語の知識が完全であることを前提としなければならぬから、現実にはそのような場合を指摘することは困難であるが、それが存在しうることは確実であらう。

後者、即ち訳言語の相対的欠陥に原因がある場合は両言語の用いられている文化的背景に著しい相違の存在する時には決して珍しいことではない。それは次のような場合である。即ち訳者が原文の記号のさし示すものを明確に理解し得ても、それを表現すべき訳言語の形式を見出しえないことがある。最もはつきりしている場合は、そのものが訳言語の用いられている社会に全然知られていない場合である。このような時に訳言語にそれを表わす記号が存在しないのは当然である。しかしこの場合に何らかの意味でそれに類似したものが見出されるならば、それを示しうる記号

をもって代用することが行われうる。この行為は訳言語による説明を加えるならば大して誤解をひき起すこともないであろうが、訳文中断して訳者が一時前面に出なければならぬ不便を伴う。もしこの訳が一般に受容られるようになれば訳者は訳言語の記号の用法を拡大したことになり、語義の借入となる。また翻訳をあきらめて原言語の記号を音（または文字）のみ訳言語に適するように修正して訳文中に挿入することも行われる。この場合も勿論説明が必要であり、その記号が一般に受容られれば語（または語群）の借入となる。

また、原文でさし示されているもの（または事柄）が訳言語の用いられている社会に全然存在しないわけではないが、それに注意が向けられない等の原因（我々にとって原因は問題ではないが）から、それをまとめて表現する記号が存在しないという場合がある。この場合の認定は、しかし、微妙な問題を含んでいる。第一に今問題となっている段階ではもはや原言語の記号一つに訳言語の記号一つをあてる必要は毫もないのだから、原記号から理解されるものを何個の訳記号を用いて表わしても一向に差支えはないはずである。ものが分っているのならば何とかそれを表現できるはずであるとも考えられる。それならばこの場合に翻訳ができないというのは訳者の落度ではなからうか。通常の場合たしかにその通りであるかも知れない。英語の *sweet lady* の *sweet* が訳せないのは訳者の力が足りないからかも知れない。次の例ではロシア語の *нежно* の訳に英訳者の苦心がうかがわれる。

Черная бархатка мелопона особенно нежно окружила шею. Бархатка эта была прелесть……

英訳

The black velvet ribbon of her locket encircled her neck with especial fondness. This velvet ribbon was

charming……

和訳

像牌の黒天鵝絨は殊更にうまく頸の周囲を取り囲んだ。この天鵝絨は実によかった。

別の和訳では「ことさらに柔かく頸を包んでゐた」となっている。このほか「やさしく」「優美に」などいくつかの訳が考えられよう。いずれにしても表わされているのは客観的な属性ではなくて主観的な感じであり、訳者がその感じを理解したとしても、それをびたりと言ひあてるような訳文が見出されないことは決して珍しいことではない。これよりもっと具体的な事柄でも同様の困難がみられることがある。例えば英語で *She threw back her head.* という場合の具体的なしぐさは分かっていてもやはり日本語で表現しにくい。「うなじを反らす」という訳を提案する人もあるが筆者はあまり感心しない。次の例はどうであろうか。

Один из сходивших вниз с портфелем худощавый чиновник, приостановившись, неодобрительно посмотрел на ноги берущего и потом вопросительно взглянул на Облонского.

英訳

A lean official on his way down with a portfolio stepped aside and looked disapprovingly at the feet of the stranger, then glanced inquiringly at Oblonsky……

和訳

折柄階段へ下りかけてゐた連中の一人、抱き鞆を手にした瘦形の官吏が、ちょっと歩みをとめて、忌々しげに駈け

上ってくる男の足許を眺めてから、胡散臭さうにオブローンスキイの顔をまじまじとみつめた。

こゝで問題にしたいのは *неодобрительно* と *вопросительно* である。英訳はそれぞれ *disapprovingly* と *inquiringly* とほとんど直訳しているにもかゝらず、よく原文の内容を伝えている。つまり両言語に似たような言い方があるわけである。所が和訳の方は「忌々しげに」にしても「胡散臭さうに」にしても、この場の状況をよく表現しているとは言い難い。筆者はむしろ直訳に近く「とがめるように」と「うかがうように」を用いた方がよいと思うが、いずれにせよ日本語に熟した言い方がないのは仕方がない。

熟した言い方があるかないかは次の第五段階、すなわち話し手の意図の段階で大きな問題となる。この段階では原文から理解される意図を訳文に移すことが眼目となるのは勿論であるが、訳者として注意すべきことはむしろ訳文から原文にない意図がくみ取られるようなことのないようにすることである。例えば久しぶりで息子に会った老婦人が、達者だと聞いて *Слава Богу*、と言うのを「神様のおかげで」と訳すとすれば、なるほどそれは老婦人のことば通りであるとしても、日本語で会話の中にこのようなことばが出てくるのは特殊な意図をもっていると解釈されても仕方がない。老婦人は何か新興宗教の狂信家と誤解されるかも知れない。アンナ・カレーニナの訳者はこの場合に「それが何より」と訳している。即ち第四段階以下の理解をすべて犠牲にして話し手の意図をまげないようにしているわけである。英訳が *That's a mercy*、となっているのも、老婦人に *God* ということばを使わせたくないからかも知れない。Thank God、はいずれにしても強すぎるように思われる。

次の例はどうであろう。妻が心にきめている婿の候補者に不満な老侯爵がそのことで妻と口論している。

А как она в самом деле влюбилась, а он столько же думает жениться, как я?

英訳

And What if she were in love with him and he with no more intention of marrying than I have!

和訳

が、あれが実際に思い込みでもしたらどうする気ぢゃ、あの男は、わしが思つとるほども、結婚しようと思つとるかしらん?

文字づらでは英訳も和訳も大体同じようなものであるが、この和訳を読んで、父親が娘と結婚する意志があるわけはないから、つまり「あの男」には結婚の意志が微塵もないということを老侯爵は強調しているのだと悟る読者が何人いるであろうか。これに反して英訳の方はほとんど間違いなく、そういう意味に解釈されるであろう。このような違いの原因は英語ではこのような廻りくどい否定の表現がかなりふつうに行われるのに反して、日本語では「お天道様が西から登る」位の例外を除いてはあまり行われないう点にある。そこで話し手の意図を間違いなく保存するために、このような言い廻しをあきらめて端的に強い否定を使用する方が賢明であろう。何故ならば訳文の「わしが思つとるほども」は老侯爵が推測している程度にでも、の意味に誤解される恐れが大いにあるからである。

これはロシア語が英語に訳しやすく日本語に訳しにくい例であるが勿論反対の場合もある。次にあげる例では直接の困難は理解の第二段階に存するがそのために話し手の意図が英訳では伝え難くなっている。コンスタンチン・レーヴィンが零落している兄ニコライの住居を訪れると、ニコライは思いがけなく弟に会えて狂喜するが、仲違いしてい

る弟の来訪の目的を疑ってそっけなく追返えそうとする。

——Я писал и вам и Сергею Ивановичу, что я вас не знаю и не хочу знать. Что тебе, что вам нужно?

英訳

‘I wrote both to you and to Sergei Ivanovich that I do not know you and do not wish to know you. What is it——what do you want?’

和訳

「俺はあんたにもセルゲイ兄哥にも手紙でさう言つてある筈だ。俺はあんたがたを知らない、又知りたいと思はない。お前は、いやあんたは、何御用があたりですな？」

ニコライがわざと他人行儀な口のきき方をしていることは英訳からは分らない。二人称に *вы* と *ты* を使いわけする習慣が英語にないからである。この場合に古い英語をもち出して、*thou* を用いるのが馬鹿げていることは言うまでもない。もっともスペインを舞台とした小説の中でスペイン語の会話の感じを出すためにわざと *thou* を用いた現代作家はいるけれども、それは別問題である。源氏物語に「あなはら」という言い方があるからと言って、英語の *Oh, my legs!* (あゝ、足が痛い) を「あなあし」と訳す人もなからう。

右の例から一般的に言葉遣いの問題が引出される。英語に *вы* と *ты*、*vous* と *tu*、*ella* と *tu*、*Usted* と *tu*、*Sie* と *du*、*de* と *du* などの区別がないことは、ヨーロッパの大部分の言語から英語への翻訳を困難にするであろうか。そうではない。困難が生ずるのは右の例のように話し手がわざと言葉遣いに特殊な意図を含ませる場合であつて、通

常の場合は話し手はほとんど無意識にその場その場になつた言葉遣いをしてるのであるから、そのような区別のない国語ではすべてに通用することばを用いて訳しさえすれば話し手の意図を再現しうるのである。むしろ厄介なのは逆の場合、即ち言葉遣いの簡単な国語からそのやかましい国語に訳す場合である。この場合に原文にひきずられて、訳文に場になつた言葉遣いを与えることを怠るならば、原文にない軽蔑や嘲笑の意図が訳文から読みとられる結果となる。英語から日本語に訳す場合に敬語や男女の言葉遣いの訳し分けがいかにわずらわしいものであるかは我々が日常経験している所である。

しかしこのような問題は所謂言葉遣いに限らず言語活動の全般にわたって存在する。それぞれの場に適當である言ひ方とそうでない言ひ方がある。従つて話し手がふつうの言葉をつかつている限り、訳者は個々の場に適した言ひ方を訳文に与えなければならない。さもないと訳文に原文にない意図が読み込まれることとなる。そうでない場合にも意図のよく分らない訳文ができ上る。道路に「止まれ、見よ、聞け」と書いた立札があつて、それが「踏切注意」の意味だと分るとすれば、日本人は確かに勘のよい国民にちがいない。スケート場でキッティがレーヴィンに言う。

——Надевайте же коньки, и давайте кататься вместе. (スケート靴をお穿きになつて、一緒に滑らして下さいましな)レーヴィンがこれに答えて言うのは——Сейчас надеву. (英語に直訳すれば at once (I shall) put on.)である。このことばの和訳は「ぢや、すぐ穿いてきましょう」であり、英訳は実に I will go and get some at once. である。即ち надеву という語を全然訳していいないのである。しかし原文にその語が最初からなければ、この英訳も出来なかつたろうから、その意味では訳しているとも言える。つまりこの場合のこのロシア語にあたる英語の言ひ方

を場面に即して考えたわけで一々の語は問題にならない。なお、和訳では「……きましょう」が加わり、英語は
and……となっているのも興味深い。

八

さて、以上翻訳に関する様々な問題を考察して来た。まだこの他にも問題とすべき事柄はいくらでもあるし、甚だ不得要領な箇所も多いが、すでに予定の枚数をはるかに超してしまったのでこの辺で止めようと思う。筆者にとって翻訳の問題はむしろ今後の課題であって、こゝに述べた所は大ざっぱな目論見にすぎないし、いくつかの作業仮説のようなものも大いに改変したり補充したりし、何よりも詳細な事実によって裏付けしなければならない。そのような不完全なものを本研究誌上に発表することは大いに気がひけることであるが不精者の筆者にとっては、完全を期してばかりいてもなかなか考えをまとめる機会は来そうもないので敢えて活字にしていたくことにした。